

熊本県立芦北高等学校 平成30年度学校評価表

1 学校教育目標

【教育目標】 『地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践』

地域からの注目や期待が大きいなか、それに応えるためには、どのような子どもを育て、どのような取り組みをしなければならないか常に考えて行動する。また、本校の校訓「敬愛・勤勉・創造」の具現化に取り組み、豊かな人間性と社会を生き抜く力を育て、活気に溢れた学校づくりを目指す。

【目指す生徒像】

・人の心の痛みのわかる生徒を育てる ・自然とあいさつのできる生徒を育てる ・夢に向かって努力する生徒を育てる
挨拶や服装など基本的な生活習慣が身につけており、当たり前前を当たり前前に実践し、自分の意見や考えをしっかりと周囲に伝えることができ、何事にも果敢にチャレンジする芦高生を育てる。

(Challenge for your Dream! 芦高で君の夢に果敢にチャレンジしよう!)

【教師の目標】

(1) 生徒一人ひとりを理解し、優しさや厳しさを兼ね備えた深い愛情で見守るとともに、生徒・保護者・地域の思いを受け止め、目指す生徒像の実現に努める

(2) 校務改革を意識しながら、「教師力」「担任力」そして「人間力」を磨き、生徒や保護者から尊敬され、生徒があこがれる教師を目指す。

2 本年度の重点目標

(1) 基礎学力向上

ア 一人ひとりの生徒に応じた授業の工夫や改善と個別指導を徹底する。

イ 図書館の活用と読書指導の徹底による、読む力、考える力、表現する力を育成する。

ウ 学力向上のための学習支援の実践（スタディサプリ等の活用による学び直し）

エ 教師と生徒が一体となった授業（公開授業の実施、グループ学習等の導入、資格取得の実施など）

オ 教育の情報化と校務のスリム化による指導時間の確保と徹底（PC・タブレットやプロジェクターの活用、教材のICT化、HP掲載、プレゼンテーション活用）

(2) 健全な心と身体を育む生徒指導

ア 生活指導を充実させ、基本的な生活習慣を確立することで、生徒の健康・安全教育の推進を図る。

イ 教育相談体制を充実させ、生徒の心のケアと安心して学校生活を送れる体制づくりに努める。

ウ 部活動を推進し、生徒の心と身体の鍛錬と活気溢れる学校生活を実現する。

エ ボランティア活動や環境保全活動等をとらして、郷土や自然を愛し、大切に心身の育成に努める。

(3) 夢を拓けるチャレンジ

ア 地域の信頼に応える教育を充実させるとともに、グローバルな視点で物事を捉え、社会の形成者としての資質を育み、様々な課題にチャレンジする生徒の育成に努める。

イ 専門教育をとらして経営感覚を磨き、地方創生を意識した地域活性化に寄与する人材の育成に努める。

ウ キャリア教育の視点に立った系統的な体験学習を通して、進学・就職へ果敢にチャレンジする生徒の育成に努める。

エ 学校農業クラブ活動、部活動、ボランティア活動等に積極的に取組み、地域との連携強化を図り、地域の活性化と魅力ある学校づくりに努める。

オ 教師も人間力や資質向上のために絶えまぬ研鑽に努める。

(4) キーワード

ア 「チャレンジは無数の可能性を引き出す」

考えてばかりでは始まらない。何事も行動をおこし、それから考えればよい。

イ 「命を大切に教育」

命を育て、食を育む農業教育、資源と環境を保全する林業教育、高齢社会における介護や福祉を支える福祉教育、三位一体となった芦高教育の実践。

ウ 「保護者と地域が最高のサポーター」

生徒・保護者・教師そして地域が一体となって教育による人材育成を実践する。

エ 「郷土愛」

田畑をはじめ海や山や温泉などの自然豊かな恵みに感謝するとともに、地元を見つめ直し、郷土愛が自信と誇りへと繋がる教育の実践。

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	平成31年度の3学科の募集定員120名に対し、合計90名以上の入学生を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦北高校の魅力地域へ発信し、また、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。	B	農業科は地域と連携した取り組みや商品開発等を行い、林業科は公務員や国立大学進学で好成績を収めた。福祉科は芦北町のレベルアップ事業を活用し、介護福祉士国家試験対策アプリを導入した。その結果、効果的な学習につながった。農業クラブ全国大会に4人が出場し、2人の最優秀賞をはじめ全員が入賞できた。ブログやツイッターによる情報発信を心がけたが、生徒募集には課題が残った。
		部活動の活性化	部活動加入率90%以上を目標として部活動活性化に繋げる。	魅力ある部活動の運営を通して、生徒が意欲的に活動できる環境を作る。部活動顧問の専門性を活かした地域との連携を深める。町の支援事業を活用したレベルアップ事業において、スポーツ界等で活躍する優れた講師を招聘し、生徒の夢へのチャレンジを支援する。		
	危機管理	不祥事防止の徹底	不祥事ゼロを目指し、地域から信頼される学校づくりを目指す。	月に2回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で読み上げ、不祥事防止意識を高める。定期考査や長期休業期間に職員研修を実施する。	B	不祥事防止確認事項の読み上げは月2回朝会時に行うことができた。職員研修は平均月1回行い、うち不祥事防止に係る研修を3回実施した。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年1回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。専門教育におけるTT授業の活用。	各教科でアクティブ・ラーニングを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。	A	校内研究授業を複数の教科で同一学科を対象に行い、授業検討の活性化につなげることができた。学期末の授業評価アンケートの結果を比較して、授業の改善傾向が見られた。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間10冊以上の読書量の確保を目指す。毎月1回、漢字テストを実施する。生徒一人あたり1時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の10分間読書の充実を図る。月1回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。家庭学習時間確保のため課題を工夫する。長期休業期間中、課題を出し学習させる。町の支援事業で導入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。	B	朝読書及び朝学習が定着し、落ち着いた雰囲気1日がスタートしている。漢字、計算テストは学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休業中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは運用等について進路指導部との連携が必要である。
キャリア教育(進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報として、各学期2回以上進路行事を行い、校内外のガイダンスや見学会に生徒が2回以上参加する。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりとの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、実現へ向けた積極的な働きかけを行う。	B	校内進路ガイダンス、企業見学をはじめ、多くの進路行事を実施できた。学年を問わずオープンキャンパスや就業体験への参加も積極的であった。3年内定者に対する就業前セミナーも初めて実施し意識を深めることができた。
		進路保障	2月末には、希望進路達成100%を目指す。全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。		

	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に2つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	各学科・学年の協力もあり、昨年度並みの検定試験への取組があった。また、3年生の履歴書資格欄に特記事項なしと記載する生徒が今年度もゼロであった。
生徒指導	健全な心身の育成	基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の育成	「人の心の痛みがわかる生徒」の育成。遅刻者の減少と整容指導の徹底。挨拶の励行と責任ある行動。公共意識を向上させる。特別指導件数10件未満を目指す。	挨拶運動・登下校指導や学校生活全般において、思いやりの心と責任ある行動を意識づけさせる。月1回の全校集会・全職員による服装検査授業前の整容指導を実施する。	B	学校生活全般において落ち着いた生活ができた。学校行事では活気あふれる活動が見られ、随所で他者を思いやる態度が見られた。朝学習や課外に遅刻する生徒は若干見られたが、SHR開始間際の遅刻者はほとんど見られなかった。学校生活の中で立ち止まって挨拶する生徒も増え、良好な挨拶ができた。
	情操教育の推進	安全教育の理解と徹底	交通違反・交通事故0を目指す。校内だけでなく、校外での二輪車施設率の向上を目指す。薬物乱用等に対する理解の徹底。良識ある携帯電話の使用と携帯電話のセキュリティ対策指導。	クラス指導の他に、講話・講習・講演会を実施し、話し合いの場を設ける。交通委員による二輪車の施設呼びかけ。関係機関と連携した情報安全教育の講演会を実施するとともに、携帯電話の使い方など研修内容の工夫に努める。	B	情報安全講話では新入生と保護者を対象に講話を行った。また、全校生徒には弁護士を講師に招聘し講演会を実施するなど充実できた。生徒指導交通担当による二重ロック調査と指導。また、交通委員による定期的な呼びかけ運動も実施できた。防犯については行事ごとに事前指導を徹底させ、貴重品の管理を促した
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ1回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。LHR等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	職員への校外研修の周知は定期的に行うことができた。地元での研修会への参加を積極的に呼びかけるなど、参加率の向上に努めた。
	すべての教育活動を通じた取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談・人権教育委員会で各校務分掌との連携に努めた。心のアンケートを各学期に実施することにより、課題を抱えた生徒に対して早期に対応することができた。
	命を大切にすることを育む指導の充実	命の大切さを実感させる教育の推進	命を大切にし、自尊心を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	全校集会やサマースクールなどで命に関する全体講話を実施する。教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。	B	サマースクールのDV未然防止教育は生徒の自尊心を高める契機となった。全校集会は先生方の講話に耳を傾け、内省する良い機会となっている。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成。いじめに関する問題行動の根絶を目指す。全クラスで生徒面談を学期1回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にすることを育む。「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	B	人権教育に関するLHRを計画的に実施することで、生徒に正しい人権感覚を植え付けることができた。さらに内容を検討し、生徒の実情、地元の実態に合ったものに改善していきたい。
	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年3回実施して、いじめ問題の実態を把握し、対策を早急にする。いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取りあい早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。(年3回のアンケート実施)いじめ防止等対策委員会を3回実施し、外部識者から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	B	年3回の心のアンケートを実施することで、生徒間のトラブル等を把握し、学年・担任が適切に対処することができた。外部有識者からの指導・助言を得て生徒への細やかな対応ができた。

教育 相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学期に2回行い、全職員の共通理解を図る。 保護者の理解を得て、支援を開始する。	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を4月中旬までに把握する。「気づきメモ」週間を学期に1回実施する。教科担当者会をふまえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。	B	支援対象生徒について担任による個別の教育支援計画・指導計画の作成を行い、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。しかし、各教科による指導計画の評価はまだ徹底されていない。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（3年生）の進路決定100%を目指す。1・2年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	B	3年生は学年と進路指導部との連携により、生徒の希望通りの進路決定ができた。1・2年生については職員間での共通理解を今後も深めていきたい。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。 職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。 必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	定期的に教育相談委員会を実施し、情報交換を行った。しかし、個別の指導計画の検討や課題解決までの話まではできていない。要支援の生徒に対してのケース会議を早急に行うことができなかった。
地域 連携 (コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を3回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、地域合同防災訓練への参加等の検討。	B	学校運営協議会を3回開催し、校内の避難所運営マニュアルの見直しを行った。地域と連携した防災体制の充実については、今後も継続した取組が必要である。
		平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会の1回を、平常時における地域連携に充て、具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙千屋地区住民の参加型交流活動の検討。	A	乙千屋地区・道川内東住民と共同でセミナーハウスへの避難訓練を行った。消防署からの講演も実施した。災害時以外での地域との連携は、今後も検討を重ねていきたい。
	芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分な効果が上がる活用を実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	A	海外研修や資格取得、部活動生の競技力向上等に有効活用することができた。公務員指導におけるスタディサプリの活用、修学旅行での学科の特性を生かした取り組みなどを実施できた。さらに、全ての生徒の基礎学力向上や希望進路の実現に資する魅力あるプログラムを今後も考案し、本校教育の魅力としてアピールしていきたい。	

4 学校関係者評価

- (1) 介護技術講習会を見ると、生徒のレベルが高く、1年間での成長の早さを感じる。生徒も先生方も頑張っている。福祉科を卒業した子たちは、離職率が低いと感じている。
- (2) 前期選抜を受ける中学生の面接練習の中で、目標を持っている発言が多い。明確な目的を持って望むものもいる。先輩の芦北高校での活躍をしっかり見ているので、入学した生徒を鍛えていただきたい。学力面も高めてほしい。
- (3) 職場の新入社員を見ているが、コミュニケーション力の大切さを実感する。企業側から見るとそこが大切である。
- (4) 入前期選抜の数を見るとOBとしても応援したい。頑張るOBもいろんな場面で紹介してほしい。
- (5) 前期選抜で募集定員を満し、県外受験生への下宿の開拓など、芦北高校の先生方の指導について、よい評判を聞いている。生徒が伸びていると感じる。
- (6) 以前は生産物の販売に生徒が来てくれたが、最近は来ないので、できれば生徒からの販売で購入したい。

5 総合評価

- (1) 夢へのチャレンジを掲げ、生徒が主体的に取り組む学習活動を実践し、家庭、地域との連携を深めながら「地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践」を展開することができた。
- (2) 生徒募集では、年度当初に設定した目標を上回ることはできなかったが、芦北町の支援事業と併せて、職員一人ひとりがそれぞれの立場でPR意識を持ち、生徒の姿を前面に出す広報活動をさらに進めていきたい。
- (3) 部活動の活性化が学校の活性化に大きく貢献している。空手道、新体操が全国大会出場を果たし、野球部のベスト16、サ

ッカ一部の地域連携及び、地元小中学生にも呼びかけた運動部活レベルアップ事業の実施など、活動の工夫が見られた。

- (4) 学校農業クラブ活動では、学校農業クラブ連盟全国大会における農業鑑定競技（森林の部）と意見発表（ヒューマンサービスの部）では、本校生がダブルで最優秀賞となり、他の生徒も優秀賞を獲得することができ、本校通算24回目の日本一を獲得できた。
- (5) 職員の授業力向上に向け、協働・協調的な学びやICT機器の活用を取り入れる授業改善をすすめ、研究授業においても職員の相互評価に協働・強制的な要素を取り入れた。次期学習指導要領について研修を深め、アクティブ・ラーニングの取り組みを強め、さらなる授業改善を進めていく必要がある。
- (6) 公務員は今年も素晴らしい合格実績を得ることができ、福祉科からも初の合格者を出すことができた。進学は国立大学3名合格をはじめ全員が第一志望に合格を果たした。就職も100%内定した。
- (7) 人権教育では、「人の心の痛みがわかる生徒の育成」を目指し、人権尊重の精神を高める多くの取組を行った。また、心のアンケートや面談により生徒の把握に努め、職員間で生徒指導の共通理解を図るよう努めた。いじめや生徒間のトラブルには、早急に対応し、事案の早期解決を図ることができた。
- (8) 乙千屋地区・道川内東住民と共同でセミナーハウスへの避難訓練を行った。消防署からの講演も実施した。災害時以外での地域との連携は、今後も検討を重ねていきたい。
- (9) 特別支援教育では、多様化した生徒が増え、個別の支援計画の作成しながら対応を進めた。SSWや支援学校のコーディネーターとの連携も進めた。スクールカウンセラーとの教育相談でも多くの成果をあげる事ができた。
- (10) 芦北町の支援事業では、海外研修や資格取得、部活動生の競技力向上、スタディサプリの活用、修学旅行での学科の特性を生かした取り組みなどを実施し有効活用することができた。

6 次年度への課題・改善方策

- (1) 芦北町の支援事業を受け、生徒のレベルアップと町への還元をテーマに、生徒のチャレンジ精神を刺激する魅力的な取組をさらに進める。
- (2) 進路指導では、地域の後継者育成を目指す一方で、国立大学への進学指導にも力を入れ、地域の中学生の進学ニーズにもしっかり対応していく。
- (3) 学校改革の取組を積極的に進め、職員の負担軽減と業務の効率化に繋がる取組を進めていく。
- (4) 本校の魅力発信を広げる広報活動に全職員で取り組み、地域との連携を深めた学校教育を推進し生徒募集に繋げる。
- (5) 教科指導では、生徒の知的好奇心を刺激し、主体的な学びを引き出す授業づくりを目指す。また、生徒の授業評価を職員の自己評価に反映させ、指導力向上への工夫改善に取り組む。
- (6) 専門教育では、各学科間の連携や協働、大学や地域団体との共同研究を深め、生徒や地域のニーズを的確に受け止めながら地域と連携した教育活動をさらに展開する。
- (7) 芦北支援学校高等部佐敷分教室との交流及び共同学習は、各学科の学習活動や生徒会活動、職員研修等における連携を更に深め、充実を図る。